

# 神奈川における縄文時代文化の変遷VI

## －中期後葉期 加曽利E式土器文化期の様相 その4 文化的様相(2)－

縄文時代研究プロジェクトチーム

### I. はじめに

平成12年度から開始した中期後葉期・加曽利E式土器文化期の様相をめぐる研究の4年次目にあたる平成15年度は、前年度に行った竪穴住居址・柄鏡形（敷石）住居址以外の各種遺構の分析に焦点を絞った研究活動を実施し、集落構造や墓制の様相については次年度以降の検討課題とした。

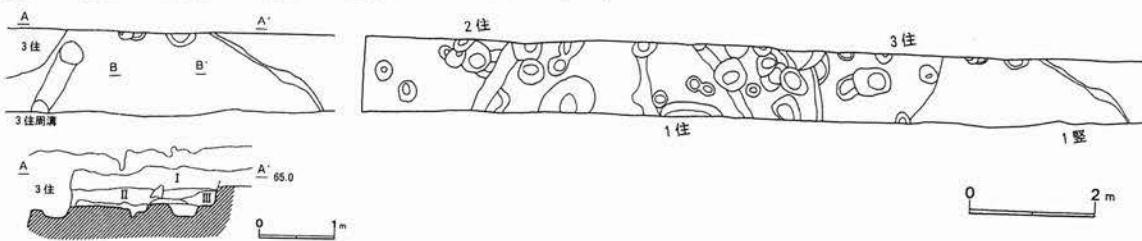
該期は、前年度の集成を待たずしても明らかのように、非常に多くの竪穴住居址が認められ、それ故それらの研究も盛んに進められてきたと認識されるが、その他の遺構については必ずしもそのような研究状況にあるとは言い難い。このような認識から、住居址以外の各種遺構の分析から該期にどのような特徴や傾向が把握できるのかが本年度の研究主眼である。以下、各遺構毎に検討を加えていくこととする。（恩田）

### II. 住居址以外の遺構

#### 1. 竪穴状遺構（第1図）

一般に竪穴状遺構とは地面に竪穴を掘ったもののうち、竪穴住居址のように、炉や柱穴などの付属施設を完備しないものをさす。この竪穴状遺構と竪穴住居址の違いは報告書や研究者によって差異がある。柱穴はあっても炉址がないものを竪穴状遺構と呼ぶ考え方もある一方、発掘調査では遺構の全体を調査できるものばかりとは限らないので、炉址がなくても竪穴住居址として報告している遺跡もある。そこでここでは竪穴状の掘り込みはあるが、炉と明瞭な柱穴をもたないものを紹介する。

竪穴状遺構と報告されているものは前期や中期初頭等に比べると少なく、数例しかない。これは炉や柱穴をもたない遺構を竪穴住居址として報告している影響もあるかもしれないが、主要な要因は、しっかりした柱や炉をもつ竪穴住居が多数作られているからであろう。第1図の勝坂遺跡例は方形基調のものである。一部分の調査であるため規模は不明であるが、一辺3.5m以上はある。それは竪穴住居址がある集落内的一角から検出されていることから遺構の性格は、簡易的な居住施設又は日常的な居住施設以外の施設、例えば作業施設や倉庫的な施設の可能性が想定されるかもしれない。



第1図 竪穴状遺構 [S=1/100, 1/1200]

## 2. 掘立柱建物址（第2・3図）

掘立柱建物址では遺物が伴出することが少ない。また掘立柱建物址は勝坂式期から連続する集落で発見されると掘立柱建物址の時期を特定するのは難しい。しかし中期後葉期に限定できる掘立柱建物址もある。現在報告書が刊行されているものの中では相模原市山王平遺跡1号・3号掘立柱建物址（第2図2・3）は柱穴内から加曾利E式土器が出土しており、中期後葉期の所産であると思われ、川崎市宮添遺跡では出土遺物はないものの、周囲の遺構などから中期後葉期に属すると推定した掘立柱建物跡が5基報告されている（同4）。また正式な報告ではないが、港北ニュータウン内で中期後葉に限定できる掘立柱建物址は横浜市二の丸遺跡、三の丸遺跡、神隱丸山遺跡などで少なくとも20例以上確認されているようである（石井1989）。また綾瀬市道場窪遺跡でも1基の存在が発表されている。

港北ニュータウンでの成果をまとめた石井氏によれば、中期後葉期は柱穴が長方形に一巡するものが多く、二重に巡る勝坂期特有のものはみられないらしい。また一巡するものの中でも、短辺が2本の柱穴からなるものが多く、長辺が5mを超える大形のものが顕著であるという。短辺が3本の柱穴から構成されるもの（同5）は後期に多く該期には少ないが、該期のものは大形で柱穴間隔が広いらしい。炉をもつものもある。

ここで港北ニュータウン外の遺跡の掘立柱建物跡を見ると、山王平遺跡の2例、宮添遺跡の5例中4例、道場窪遺跡の1例が、柱穴が長方形に一巡し、短辺が2本の柱穴からなるものであった（同2～4）。またその規模は、山王平遺跡例が長辺5.5m、7m、宮添遺跡例が長辺6.5m、7.5m、8.5m、10mと5m以上の長大なものが多く、道場窪遺跡例が4mと小形であった。これらのことは石井氏の指摘と合致し、港北ニュータウン内での傾向が県内他遺跡にも通用することを示している。しかしその一方、宮添遺跡では柱穴が二重に巡るものが1例ある。二重に巡るものは一般に勝坂式期のものと言われ、これが中期後葉期にも存在するのか否か、石井氏も言及しているが、その追求が必要であろう。

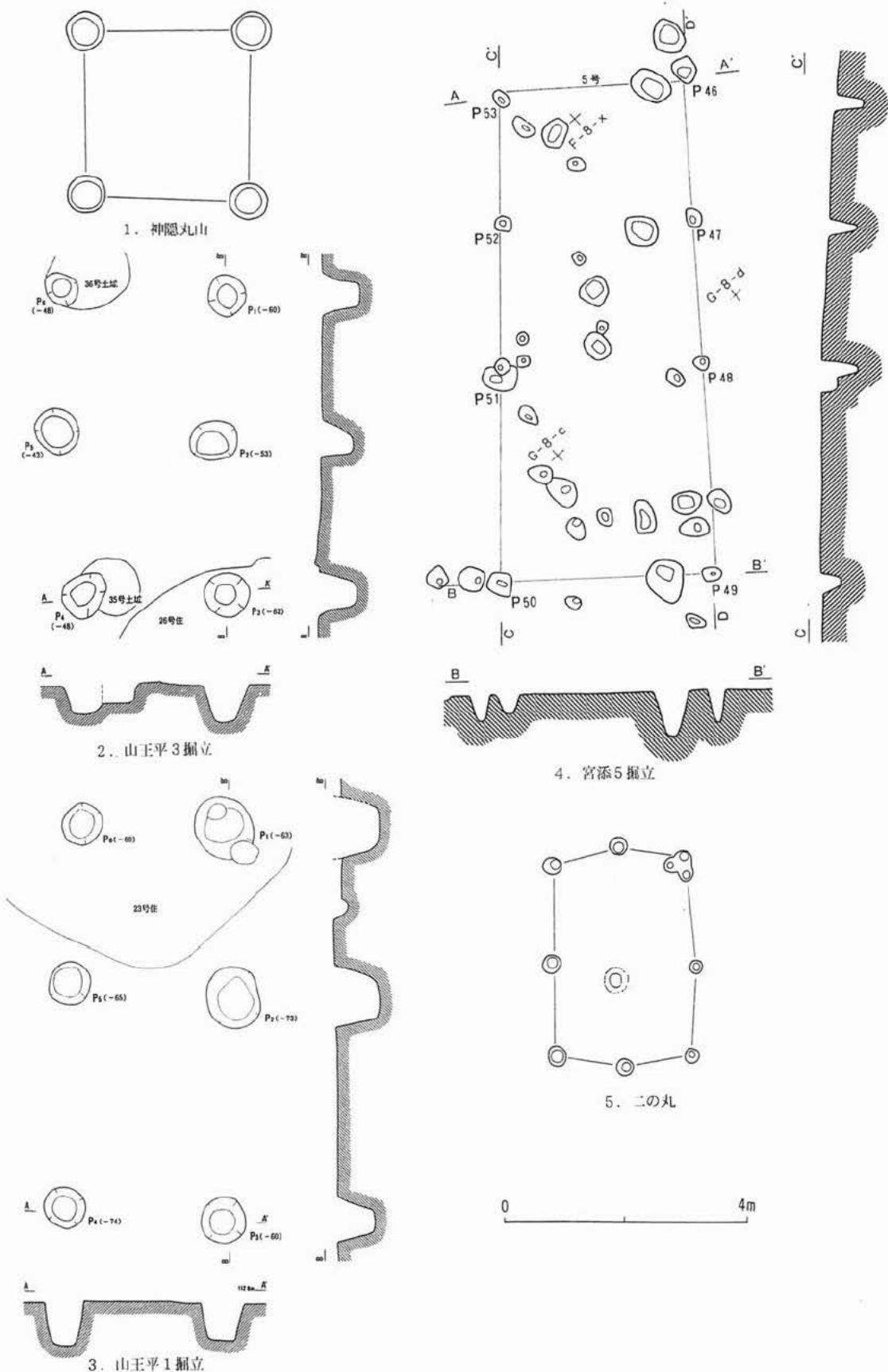
集落内での位置を見ると、山王平遺跡では環状に巡る竪穴住居址群帶の内側、中央土坑群の外側に、住居址と同規模（長軸長6～8m）の掘立柱建物址が帶状に分布している（第3図上）。また神隱丸山遺跡や宮添遺跡では竪穴住居址群帶の内側にやや大形の掘立柱建物址が分布している（同下）。いずれも掘立柱建物跡の長軸が環状に巡る竪穴住居址群の環の方向と平行し、集落中央を向かないこと、掘立柱建物跡が中央の土坑群より竪穴住居跡群の分布帯に接近して占地する共通点があり、それらの影響もあってか、中央の土坑群の分布との明確な対応関係を見ることはできない。またその一方、勝坂式期と比べると、一遺跡内の遺構数に占める掘立柱建物跡は幾分低くなっているようである。勝坂式期の横浜市前高山遺跡では竪穴住居跡より多くの掘立柱建物跡が残されており、勝坂式から加曾利E式期に連続的に営まれた横浜市南原遺跡では勝坂式期の掘立柱建物跡は多数あるが、加曾利E式期のものはないからである。中期後葉期は竪穴住居跡が非常に多くなるので、掘立柱建物跡は竪穴住居址に比べ数が少くなり、その結果、中期後葉期のものは共同利用的性格が想起されやすくなると言える。機能としては竪穴住居址とは異なる居住施設、作業施設、倉庫・貯蔵施設、祭祀・葬送儀礼設など、さまざまな可能性が考えられ、今後の研究課題と言える。

### 参考文献（報告書は除く）

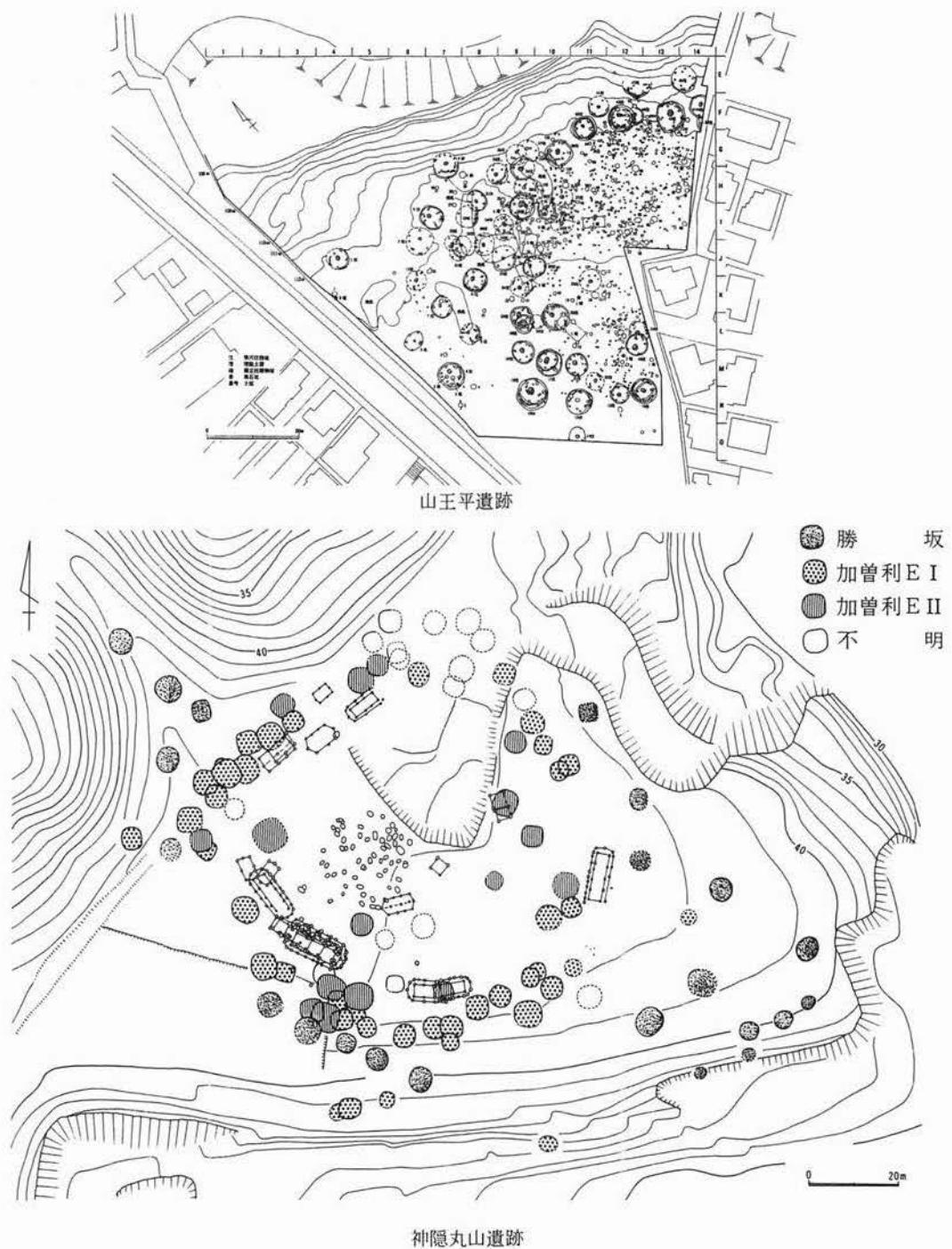
石井 寛 1989 「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究集録』6

## 3. ピット群

ピットは時期判別が難しいが、ピットの覆土から該期の土器が出土したり、該期の集落からピットが発見



第2図 掘立柱建物址 [S = 1/100]



第3図 集落址内での掘立柱建物址 [S = 1/1500]

されることから、中期後葉もピットが多数存在したことは明らかである。そのうちピットが規則的配置をとるものは掘立柱建物址として扱ったが、規則的配置をとらないピットも同時期に多数存在する。そのうちピットがある限られた場所に集中して存在することがあり、藤沢市No322遺跡、相模原市相原森ノ上遺跡、座間市米軍キャンプ座間地内遺跡などでは、該期の住居址と近接して出土した多数のピットに対して、ピット群として報告している。性格としては竪穴住居址や掘立柱建物址の柱穴の一部、またはそれらとは異なった何らかの建物の柱穴の可能性が考えられる。

(松田)

## 4. 屋外炉址・焼土址（第4図、第1表）

「炉址」あるいは「焼土址」と呼称される遺構・痕跡は、竪穴住居址内において検出されることが通常である。従って、「炉址」・「焼土址」が単独で検出されているケースでも、周辺部における諸状況が一定の要件を満たしている場合（多くは周辺部における床面（硬化面）・柱穴・埋設土器等の検出を指す）、これを竪穴住居址として報告している例はかなりの数にのぼる。一方で、住居址に伴うとみなす根拠を明らかに欠いたものも存在することも事実である。ここで取り扱う「炉址」・「焼土址」は、調査者・報告者によって竪穴住居址に伴うとみなす最低限の根拠を欠落していると判断されたものを対象とする。

「屋外炉址」・「焼土址」として報告されている遺構・痕跡は少なくないが、当該期に帰属することが明らかなもののみを抽出すると、伴出遺物の少なさに起因しその数は激減する。第1表に、比較的確度の高いと思われるもの（12遺跡26事例）を抽出した。これらに対して報告者が冠している名称は、「炉址」・「炉穴状遺構」・「焼土址」・「焚き火跡」等様々で、形態的には区別のつかないものに別の名称が付されているケースも少なくない。

屋外炉址と考えられるものは、5遺跡10例存在する。うち、藤沢キャンパス遺跡の1事例、中原・加知久保遺跡の1事例、大地開戸遺跡の2事例、尾崎遺跡の4事例は、石囲あるいは埋甕の形態を採るもので、かなり蓋然性の高い事例といえよう。畳屋の上遺跡で検出されたJ5号焼土址は特別な施設を有するものではないが、掘り方底面・壁面に硬化した顕著な燃焼面が形成されており、一定期間の使用を窺わせる。屋外地床炉の可能性があろう。

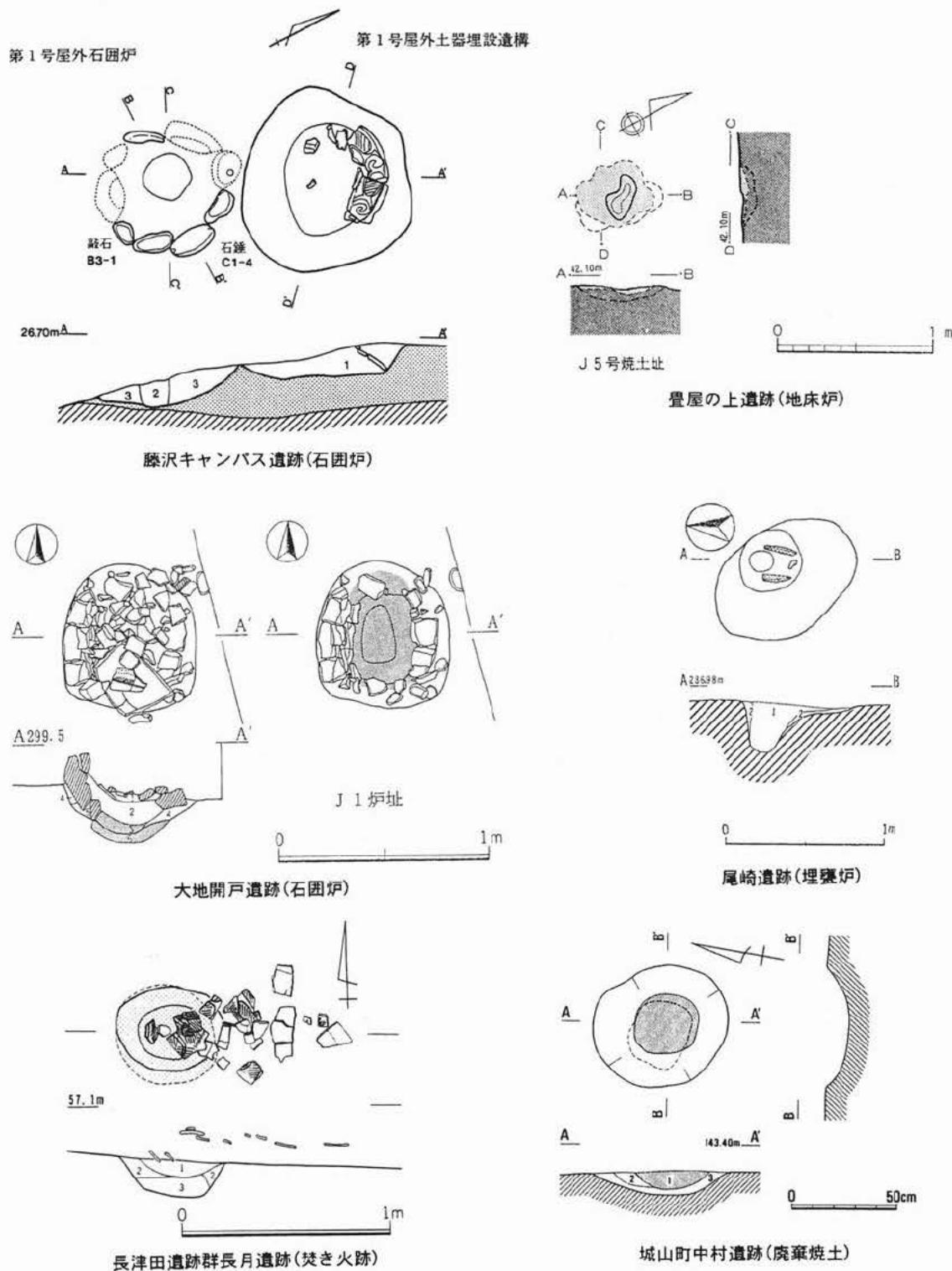
焼土址と考えられるものは、9遺跡12例存在する。焼土址と判断したものには、明確な掘り込みを有するものと掘り込みをもたないものの別がある。前者は屋外地床炉と形態的には区別できないものであるが、顕

第1表 中期後葉期の屋外炉址・焼土址

No.	遺跡名	遺構名	時 期	用 途	備 考
1	泉警察遺跡	J1号焼土址	II段階	焚き火跡	底面・壁面燃焼面
2	F畳屋の上遺跡F区	J4号焼土址 J5号焼土址	II段階 II段階	廃棄焼土 屋外炉	覆土中層に焼土混入層 燃焼面硬化
3	長津田遺跡群長月遺跡	焚火跡(ST001)	IV段階	焚き火跡	覆土下層に焼土層
4	藤沢キャンバス遺跡Ⅱ区	第1号屋外石囲炉	III段階？	屋外炉	石器・円盤で楕円囲繞
5	中荻野成井田遺跡	炉穴状遺構	II～III段階？	廃棄焼土	覆土中層に焼土層
6	及川中原遺跡	焼土址	III段階	焚き火跡	焚き火跡との所見
7	中原・加知久保遺跡	集石炉 石組炉	中期後葉 中期後葉	集石？ 屋外炉	覆土中層域に焼燐 河原石16個で囲繞
8	原口遺跡	J50号焼土址	III段階(曾利IV式)	廃棄焼土	焼土上面に大形土器片
9	大地開戸遺跡	J1号炉址	IV段階	屋外炉	方形石囲炉
		J2号炉址	III段階(曾利IV式)？	住居？	石囲炉、周辺にピット群
		J3号炉址	中期後葉？	住居？	石囲炉、周辺にピット群
		J4号炉址	III段階(曾利III～IV式)	住居？	地床炉、周辺にピット群
		J5号炉址	III～IV段階(曾利V式)	屋外炉	石囲炉または石置炉
10	原東遺跡	第1号焼土址 第2号焼土址	中期後葉 中期後葉	廃棄焼土 廃棄焼土	覆土上層に焼土層 覆土上層に焼土混入層
11	城山町中村遺跡	1号焼土址	III～IV段階	廃棄焼土	焼土廃棄土坑との所見
		第1号炉址	IV段階	焚き火跡	覆土下層に焼土層
		第2号炉址	III～IV段階(曾利V式)	焚き火跡	炉址内の土器二次焼成
		第3号炉址	III～IV段階(曾利V式)	屋外炉	方形石囲炉
		第5号炉址	III段階(曾利IV式)	屋外炉？	炉内より2個体土器
		第6号炉址	IV段階	廃棄焼土	暑さ8cm程の焼土層
		第7号炉址	中期後葉？	屋外炉	方形石囲炉
		第10号炉址	中期後葉？	屋外炉	方形石囲炉
12	尾崎遺跡	第12号炉址	IV段階	屋外炉	楕円形埋甕炉

著な燃焼面(硬化面)の形成が認められないものは焼土址として捉えた。焼土址の性格は、一時的な焚き火跡と考えられるものと、焼土・灰等が廃棄された痕跡と考えられるものに大別できる。覆土下層域に焼土層が形成され底面・壁面が僅かに赤化するものは前者に類別できよう。泉警察遺跡・長月遺跡・及川中原遺跡等がこれに該当する。覆土中層から上層域にブロック状の焼土層が認められるものは後者の可能性が高い。原口遺跡・城山町中村遺跡等がこれに該当する。

(井辺)



第4図 屋外炉址・焼土址

## 5. 集石（第5図）

本項では、覆土内から当該期の土器が伴出しているものと報告書で中期後半の遺構であることが明記されている集石を対象とし、その形態的特長と傾向について概観することとする。このように抽出された当該期の集石は、県内28遺跡108基を数える。

これらをまず掘り込みの有無で二分すると、その約8割、86基が掘り込みを有するものであった。

掘り込みはその断面形状から、底面が小さくやや傾斜が急な掘り込みをもつものを「すり鉢状」(1)、底面がほぼ平らで立ち上がりがやや急なものを「タライ状」(2)、同様に平らな底面を有し約40cm以上の直立ぎみのやや深い掘り込みを有するものを「バケツ状」(4)、そして掘り込みが浅く緩やかに開くものを「皿状」(5)、底面がほぼ球状で弧を描くように立ち上がるものを「丸底状」(3)の5種に便宜上分けると、これらの比率は、すり鉢状を呈するものが7基(8%)、タライ状39基(45%)、バケツ状4基(6%)、皿状17基(20%)、そして丸底状18基(21%)となる。また、確認面からの掘り込みが最も深いものは54cmで、40cm以上の深さをもつものはバケツ状としたもの以外では、すり鉢状としたものの2基のみであり、当該期の集石は底面が平らでやや浅い掘り込みのものが多いとの傾向が窺える。なお、掘り込みの深さの平均は約22cmであった。

平面形態は、やや歪んだものも含めて円形及び橢円形基調がほとんどで、その数は78基にのぼり、掘り込みをもつ集石のおよそ9割を占め、当該期以外の一般的な集石の掘り込み形態との大きな違いは認められない。その他の平面形は、不整形なものが6基、隅丸長方形が1基であった。

大きさは、平面形が円形・橢円形を呈するものでは、長径200cmを越える大きなものから、40cmに満たないものまで見つかっている。同一遺跡内においてもその大きさは一律ではないが、長径が50~150cmのものが8割を超え、平均は約100cmであった。

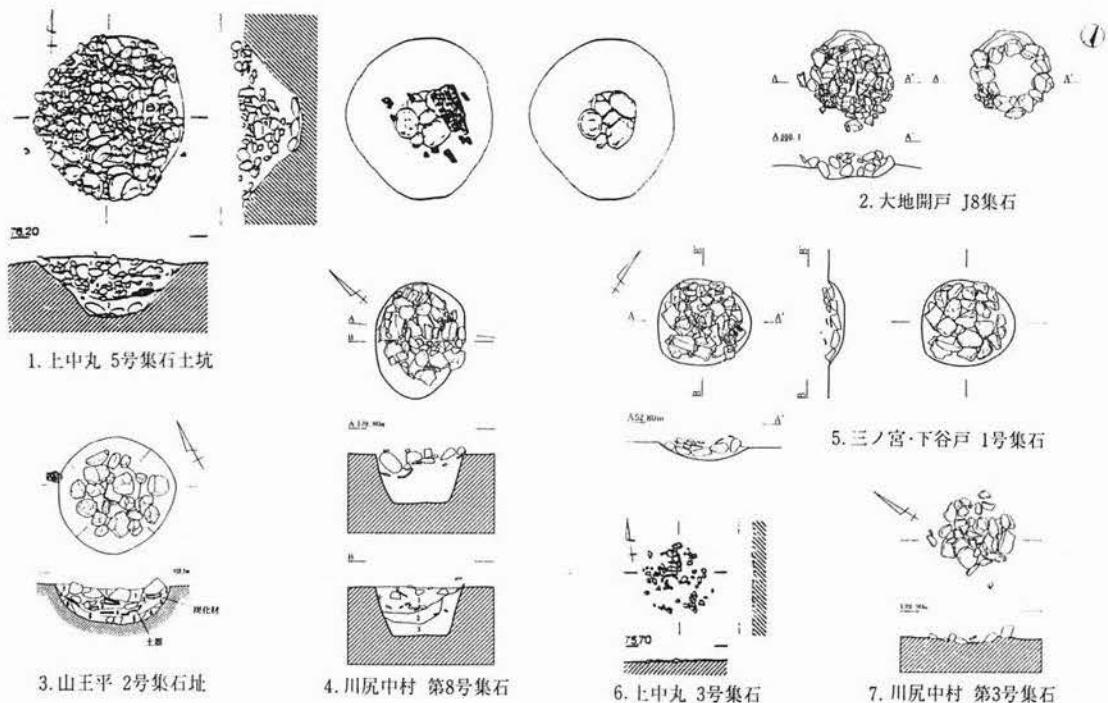
掘り込み内における礫の検出状況は、その立面分布にいくつか特徴的なものが認められる。底面に礫が集中しているもの、土坑内にはほとんどみられないが表面に多くの礫が集中してみられるもの(4)、そして掘り込み内全体に充満しているものがある(1・2・5)。これらの中で、特徴的なものとして底面に明らかに礫を敷き並べたものが挙げられる(1)。その数は20基認められ、掘り込みを有する集石の約24%に及ぶ。そのうち13基が相模原市上中丸遺跡であり、その数は同遺跡の約7割(69%)にものぼる。また、稀に側壁面に並べられているものもあり(2)、他の集石と機能・用途や、その使用手順に違いがみられる可能性も考えられる。

次に、全体の約2割にあたる掘り込みの無いもの22基については、その多くは小礫が平面的にある一定範囲のまとまりを有するものであるが、その様相は集積密度が高いもの(7)と低いもの(6)があり、一棟ではない。また、これらの多くは付随施設もなく、廃棄されたものか何らかの理由でその場に集積されたものなのか、その場で何らかの機能を有していたものなのか、その判断は難しい。

以上のように今回は表層的な形態差から、その様相と傾向を示したが、その機能・用途は上述のとおり一律には扱えない。ただ掘り込みを有する集石は、これまで行われてきた研究の成果から、調理施設としての機能していたものが多いと思われる。今後は機能・用途に基づく分類へと昇華し、調理施設とされる集石は、以前からいわれている日常、非日常利用の問題も含めて、その使用方法を更に検討する必要があろう。

なお、形態毎の時間的・空間的な分布については、特筆すべき顕著な傾向が見い出せなかった。

(井澤)



第5図 集 石 (S = 1/60)

## 6. 配 石 (第6図)

本項では13遺跡98基について、その様相と傾向について概観する。なお、下部に土坑や埋設土器を有するものについてはそれぞれ「土坑」、「屋外埋設土器」の項目で取り上げるため、ここでは主に付帯施設を持たないものについて触ることとする。

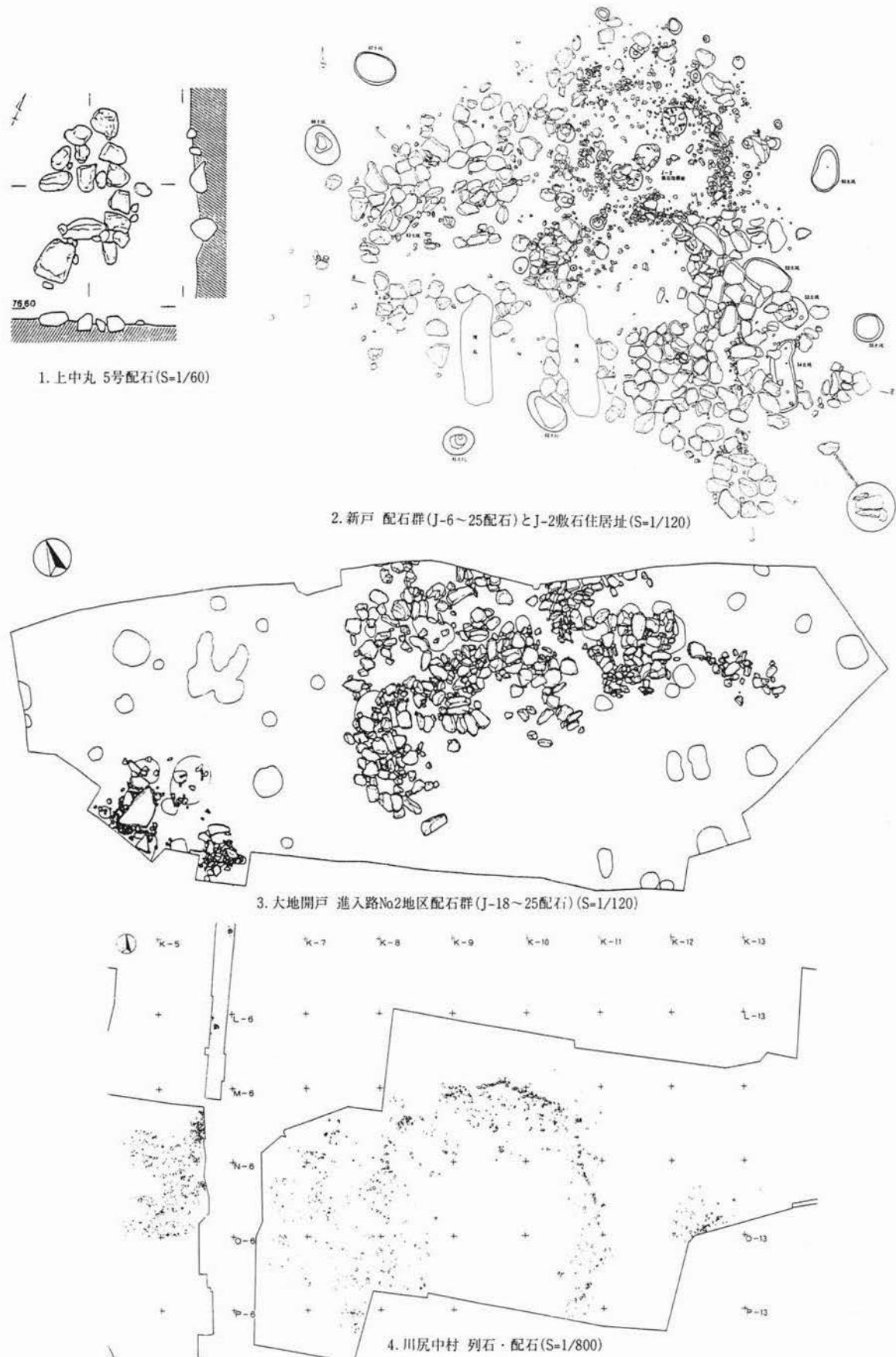
まず、その形状について、配置される礫の数は数個から数十個まで様々で、礫の大きさも配置された形状についても不規則なものが多く画一的ではない。

これら配石は範囲が100cm四方に満たない小規模なものが単体で検出されるもの(1)や、相模原市勝坂遺跡、相模原市新戸遺跡、山北町尾崎遺跡、津久井町大地開戸遺跡のように小規模な配石が群を成すものが認められる。中には大地開戸遺跡のように広範囲にひとまとまりの大形配石を形成するとも考えられるものもある(3)。また、新戸遺跡のように柄鏡形住居址と隣接している例(2)もあり、住居との関連が窺える。城山町川尻中村遺跡では、環状集落の竪穴住居群と内側で検出された墓壙群との間を区画するように巡る配石(列石)が見つかっている(4)。

配石に伴出する土器はⅡ～Ⅳ段階に相当するもので、特にⅢ～Ⅳ段階が多い。このことから当該期の配石はこの段階に構築されたものと思われる。

分布の傾向は、相模原市や津久井郡域には、今回取り上げた配石の約79%にあたる77基が見えかかっているのをはじめとして、伊勢原市、平塚市、山北町など相模側流域並びに同河川以西にそのほとんどが分布していることが看取できる。

配石の用途・機能は、その規模や石の配置形態と同様に、多岐に渡るものと思われるが、いわゆる「祭祀」の場としての機能や、葬送(埋葬)機能、川尻中村遺跡の列石にみられる日常・非日常空間を分かつ機能など、その多くは慣習・宗教など觀念的な性質を併せもつものであろう。 (井澤)



第6図 配 石

## 7. 土坑（第7・8図）

土坑として分類されている一群には様々な用途・性格のものが包括されていると考えられ、また時期を決定する遺物の乏しい事例が大半を占めている。このような資料的状況のなかで、これまでに検出された当該期の土坑全てを対象に用途・性格を特定していく作業は困難といわざるを得ない。従ってここでは土坑のなかでも遺跡内における位置や遺構の形態に比較的特徴が現れやすく、また土器等の伴出遺物がある程度確認できる土壙墓と貯蔵穴に用途が推定されるものをでき得る限り抽出することに努めた。

### ①土壙墓（第7図）

墓穴と推定される土坑で、当該期と認定し得るものは25遺跡86例確認できるが、この他に屋外埋設土器と区別の難しい14遺跡20例、貯蔵穴と区別の難しい11遺跡58例、土壙墓と推定するには根拠の希薄な26遺跡227例が存在する。なお、上記の事例数には詳細が未公表の遺跡や当該遺構単独で時期決定不能なものと対象外としているが、これらを加えると現時点での事例数はかなりの数に達する。時期的には、先の編年案の段階呼称を用いれば、I段階に比定できる明確な事例は把握できず、II段階に至り漸く少数の事例が確認できるようになる。大半の事例はIII段階からIV段階に比定されるものである。ちなみに、勝坂期では甕被葬が想定されるもの、土器の副葬がなされたと推定されるもの、形態と土器片の出土から墓穴と推定されるものに事例を大別したが、ここでは土器以外の副葬品や礫を伴う事例は特定されていない。土坑の平面形態は梢円形もしくは円形基調が多く、規模は概ね径1m内外を測ることが把握されている。

先述のような前時期の様相を踏まえて、遺物等に特徴的な出土状況の認められる中期後葉期の土坑を通覧すると、倒置された土器や大型の土器片が認められ甕被葬が想定されるもの（1～3・6）、小型土器が副葬されたと推定されるもの（1・5）、土器片の出土状況から墓穴と推定されるものが勝坂期から引き続き確認できるが、小型土器が副葬されたと推定し得る明確な事例は稀少である。土器の出土状態をみると、甕被葬が想定される倒置例が最も多いが、これが想定しにくい横置例（4・7）や正置例も事例数としては無視できず、また複数土器のみられる事例には各々異なる出土状態を示す事例（3）も存在する。土器の平面的出土位置については、長軸方向の一端に偏在を示すものが典型例で、この他短軸方向に偏在するものや中央付近から出土するものも数的には少ないが一定数確認できる。垂直的出土位置については、明らかな覆土中出土の事例が多くを占める一方、坑底面に接するような出土状態を示す事例もみられ、一様でない葬法が窺える。土器の器種は、深鉢が大半を占めるが、浅鉢・鉢・注口等の事例も散見される。土器の個体数は1個体が多数を占め、4個体以上の事例は希である。土器の遺存状態は、概ね口縁部から底部まで遺存しているもの、底部付近だけを欠いたもの、口縁部から胴部上半のもの、胴部下半から底部のもの等がみられるが、これらの別に際立った数的偏りは窺えない。土器型式からみると、県北西部域では曾利式または折衷的土器の事例が顕著である。土器以外には、石鎌・打製石斧・磨石・浮子等の石器類のほか石製垂飾品・土器片円盤等の出土も認められる。これらに加えて、中・大型の礫が用いられる事例（7・8）が確認できるが、これは石材の豊富な県北西部域に多い傾向がある。この他、土壙墓の事例ではないが、埋葬に関わる稀有な事例として横浜市青ヶ台貝塚竪穴住居址内からの熟年男子の伸展葬人骨と壮年男子の頭骨の出土があげられる。

土壙墓の平面形態は、前時期から引き続き円形・梢円形基調が存在し、梢円形基調が多数を占めるが、新たに長方形基調の事例が多く認められるようになる。平面的規模については、円形基調のものは前時期からさほど大きな変化はないが、梢円形・長方形基調のものは長短比が明瞭となる長軸1m以上を測るもののが7割を越えるようになる。集落内配置については、環状集落中央広場における墓域形成が顕著となる。（恩田）



第7図 土塚墓 [遺構: S = 1/60、遺物: S = 1/10 (但し3土器はS = 1/20、6石製品はS = 1/3)]

## ②貯蔵穴（第8図）

貯蔵穴と考えられる土坑は10遺跡29例を確認した。前述のように土坑の機能を推定するには、形態及び出土遺物などの特徴による部分が大きい。今回は特に土坑の形態に着目して貯蔵穴を捉えた。また報告書に小竪穴など他の遺構名で掲載されるものについても、規模や形態的な特徴が類似するものが含まれている場合があり、注意を要する。

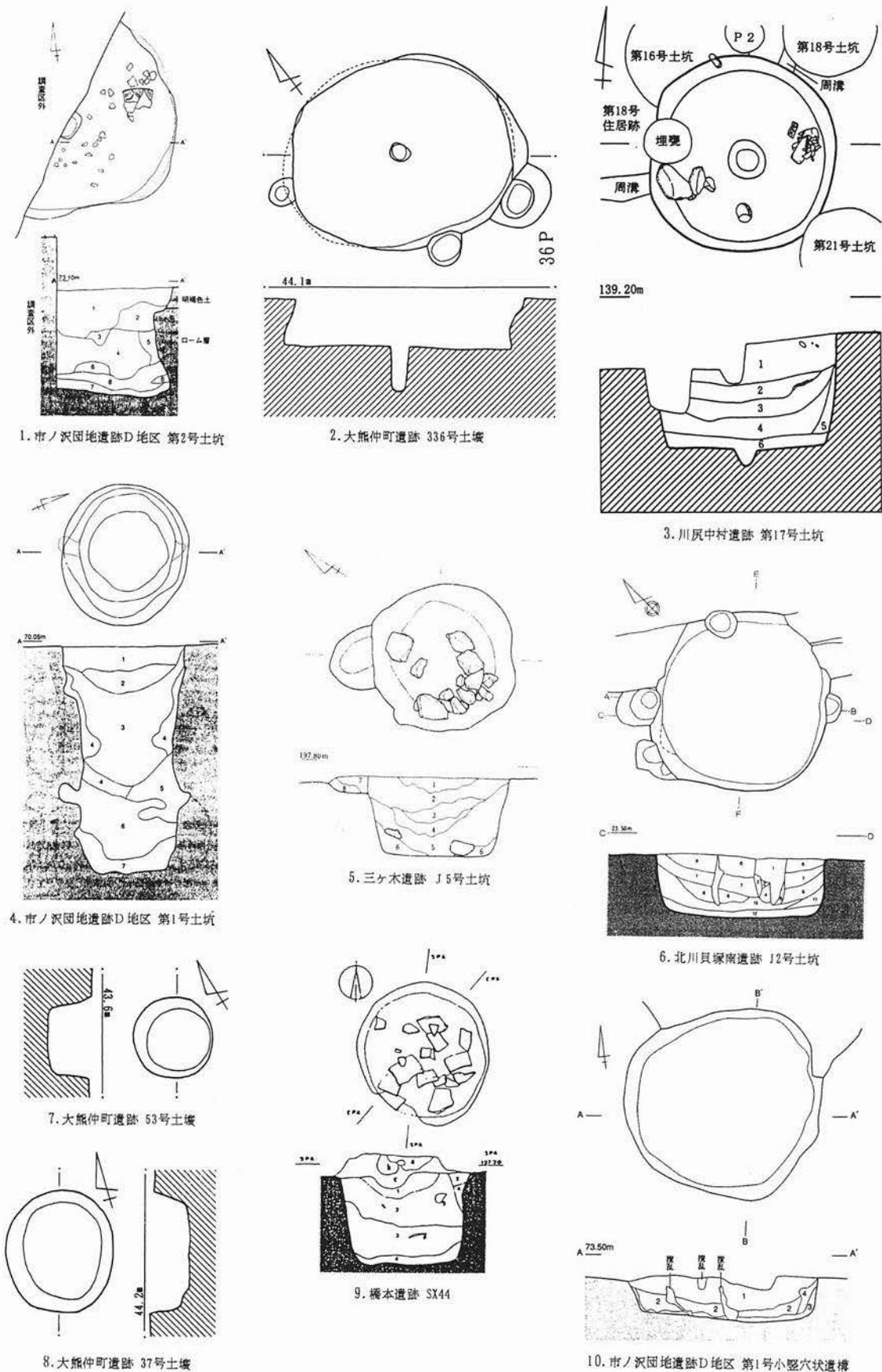
形態的な特徴はいくつかの類型が認められるが、壁の内傾しながら立ち上がる「フラスコ状土坑」などと呼称されるものが代表的であり、市ノ沢団地遺跡(1)・大熊仲町遺跡(2)などの好例がある。平面規模は径2m前後で、平面形はいずれも円形基調のものである。平面及び深さなど比較的の規模が大きいこともフラスコ状土坑の特徴である。深さについて見ると、1は1mを越えている。2は50cmで、遺構の依存状況や遺跡の立地条件などの影響を受けていることも考えられる。またフラスコ状土坑の底面にはピット状施設を有するものが比較的多く、1・2の場合にはいずれにも認められる。ピット状施設の平面規模は20~30cmで、比較的浅いものが多いと思われるが、2の深さは約40cm程度と深い。

フラスコ状土坑以外の土坑については、規模が大きい事などの特徴から貯蔵穴として捉えられるものがあるが、規模の小さいものについては土坑墓などと識別することは困難な状況である。その中で貯蔵穴として捉えられるもの及び報告書などで貯蔵穴として捉えられたものなどについて概観したい。

壁の立ち上がりがほぼ垂直で、規模が大きなものとしては、いくつかの事例がある。平面形は円形基調であるものが多く認められ、径2m前後と平面規模が大きいもの(3)が挙げられる。3には、底面に径30cm、深さ20cmのピット状施設が認められ、フラスコ状土坑と類似する特徴を有する。4は平面規模が径1.5m前後のものであるが、深さ2m以上と極めて良好な掘り込みを有する形態のものである。底面はやや起伏を有する程度で比較的平坦である。また両側壁面には足掛け状のピット状施設が認められる希少な例である。深い掘り込みが認められる土坑については、底面が平坦ではなく、狭くすぼまる形態のものも認められるが、柱穴との識別が困難である場合が多い。5・6は径1.5m~1m、深さ50cm前後のもので、底面はほぼ平坦なものが多い。壁の立ち上がりは、やや開きながら立ち上がるもの(5)、ほぼ垂直なもの(6)などがある。遺物は覆土中層から上層にかけて土器・石器などが出土している事例が認められる。また比較的大きな礫がまとまって下層及びその付近から出土しているものは5などが挙げられる。その他、底面直上付近から礫が単独で出土するものなどがある程度認められるが、底面からの出土遺物は概して少ない。

平面規模が形1.5m~1m程度と比較的小さい規模の土坑から土器などがややまとまって出土する事例は多々認められるが、土坑墓との識別が困難である場合が多い。大熊仲町遺跡では住居跡群に伴う貯蔵穴39基が報告されている。比較的規模の小さいものについてみると、形態は円形基調のもの(7)などが主体的であるが橢円形に近い形態のもの(8)なども認められる。その他、平面規模が径1m前後で土器破片などの遺物がまとまって出土する土坑も9・10などのように多く認められる。土器破片が多く出土しているもの(9)、土器片と礫が密集して敷き詰められるよう出土しているもの(10)などがある。いずれも貯蔵穴としての可能性を含むものであるが、断定することは困難である場合が多い。貯蔵穴として捉えられたものでもフラスコ状土坑の底面に認められるピット状施設の機能など、その構造は明らかでない点も多く、現状では多くの課題がある。また集落内での分布についても、三ヶ木遺跡では5など平面規模1.5m~1m、深さ1m前後の規模・形態が類似する土坑が近接して10基まとめて発見されている。いずれも貯蔵穴としての機能が考えられるものであり、集落構造との関係からも捉えていく必要がある。

(天野)



第8図 貯藏穴 [S = 1/60]

## 8. 屋外埋設土器（屋外埋甕・伏甕）（第9～11図）

ここでは屋外埋設土器、いわゆる屋外埋甕・伏甕類について扱う。分析は報告書に屋外埋設土器あるいは屋外埋甕・伏甕として記載されているものを対象としたが、住居址に伴う可能性のある事例や、明らかに墓坑への副葬と見られる事例はここから除外した。また配石と報告されているものの中で埋設土器を伴う事例については、同様に屋外埋甕・伏甕として扱っている。

**形態（第9図）：**屋外埋設土器は52遺跡299基が検出されている。これらの内で、形態が明らかにできたものは161基である。形態としては、タイプ1. 口を上に向けた正位に埋設され底部が完存するもの、タイプ2. 1と同様に正位に埋設されるが底部あるいはその一部を欠損するもの、タイプ3. 1や2とは逆に口を下にした逆位に埋設され底部が完存するもの、タイプ4. 3同様に口を下にした逆位に埋設され底部あるいはその一部を欠損するもの、タイプ5. 完形あるいは半完形の土器が土坑内に破碎した状態で埋置されるもの、タイプ6. 複数の土器が入れ子状に埋設されるものの6形態が認められた。また各タイプには土器が埋設されるのみのものと、周囲に配石が施されるものの両方が見られる。これらのうちタイプ1・2と6が狭義の屋外埋甕、タイプ2と3が狭義の屋外伏甕となるだろう。

正位に埋設され土器底部が完存するタイプ1は各形態中最も多く64基が認められ、このうち埋設土器の周囲に石が配されるものが15基あった。正位に埋設され土器の底部を欠損するタイプ2は1に次いで60基が認められる。このうち配石のあるものが9基あった。逆位に埋設され土器底部が完存するタイプ3は3基のみで、配石を伴うものも認められない。逆位に埋設され土器底部あるいはその一部を欠損するタイプ4は12基あり、このうち配石を伴うものが2基あった。土器が土坑内に破碎した状態で埋置されるタイプ5は22基あり、配石を伴うものが1基あった。土器が入れ子状に埋設されるタイプ6は10基認められた。このうち配石を伴うものは3基で、数はともかくこの形態の1/3に認められることになり、比率としては最も高い。

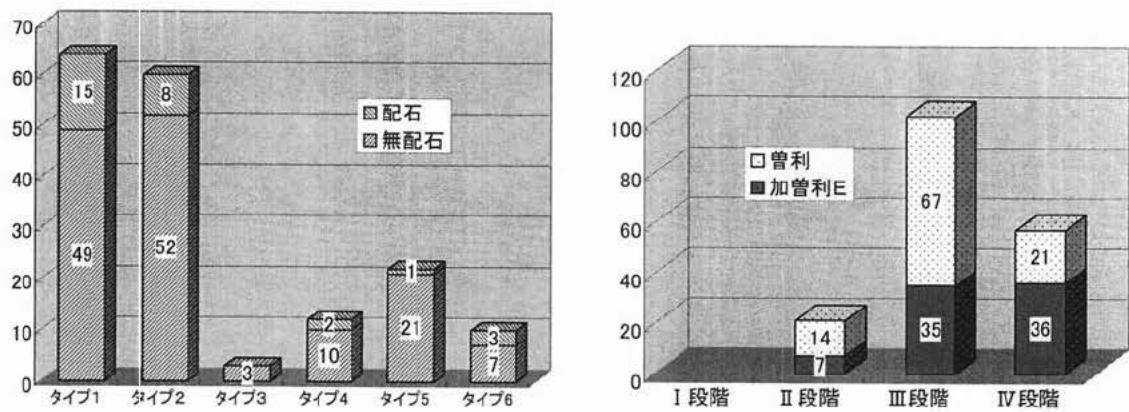
**所属時期（第10図）：**上記299基のうち、報告書の記載から所属時期を特定できたものは160基である。時期別に見るとI段階では認められず、II段階で加曽利E式のものが7基、曾利式のものが14基ある。III段階では加曽利E式が35基、曾利式が67基に増加する。IV段階では加曽利E式が36基、曾利式が21基認められた。およそとしては、II段階に出現し、III段階で激増、IV段階へ続くものと把握できるだろう。また、II～III段階においては、曾利式土器の埋設が加曽利E式を数的に圧倒しているが、IV段階において両者の数が逆転している。また、入れ子状を呈するタイプ6とした10基の所属時期はIV段階に限定される。

**出土位置（第11図）：**屋外埋設土器の検出遺跡は、資料集成した県下の当該期遺跡中55遺跡にすぎず、この時期に屋内に設けられる埋甕に対して、その存在は限定的である。規模の大きな集落遺跡では比較的多数が認められる例があり、座間市中原・加知久保遺跡で24基、相模原市上中丸遺跡で18基、城山町川尻中村遺跡で10基が検出されている。これらの遺跡は、住居址群が広場を囲んで環状に展開するいわゆる環状集落址であり、屋外埋設土器が住居址群と中央広場との境界付近に分布している状況が看取される。

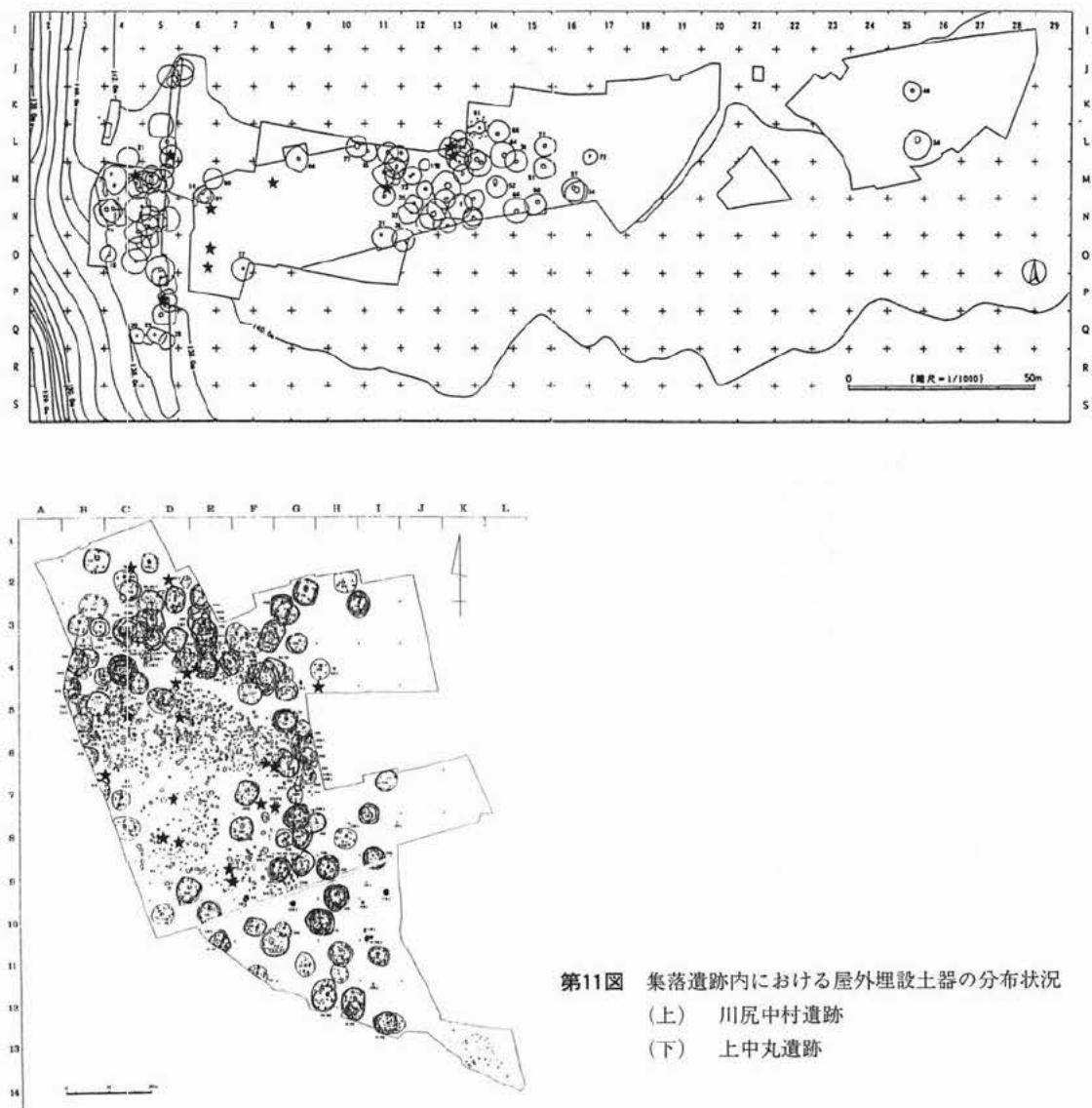
**小括：**屋外埋設土器は屋内に設けられる埋甕と形態的に近似し、時期的な変遷も重なるなど、何らかの関連性をうかがわせるが、一方で屋内の埋甕の多くが底部を抜いた深鉢形土器を使用するのに対し、底部を完存する例が半数強を占めるなど相違点も少なくない。配石を伴う事例が少なくないことや集落の中央広場に接して設けられることの多いその位置から、幼児の埋葬や再葬等の埋葬儀礼に関わる施設としての捉え方も可能だろうが、埋設土器の形態は多様であり、他の機能を有する施設を含んでいる可能性も高い。現状では埋葬儀礼との関わりについて可能性を指摘するにとどめ、資料の増加と新知見の発見を待ちたい。（小川）



第9図 屋外埋設土器



第10図 各類型の検出数と屋外埋設土器の時間的推移



第11図 集落遺跡内における屋外埋設土器の分布状況

(上) 川尻中村遺跡

(下) 上中丸遺跡

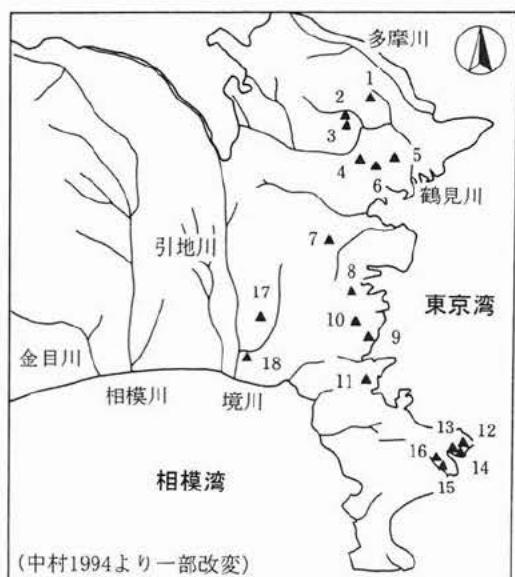
## 9. 貝塚・住居内貝層（第12図、第2表）

神奈川県内における縄文時代の貝塚は113箇所が知られている（御堂島・長岡1990）が、このうち時期や内容がある程度明らかになっている主要貝塚（90箇所）に関しては、中村若枝氏によって分布図・一覧表が作成・提示されている（中村1994）。これに基づいて中期後葉期に帰属する貝塚を抽出したものが第2表である。当該期の貝塚は18貝塚（遺跡）が確認されているが、うち1貝塚内で複数地点あるいは複数層の貝層・貝ブロックが検出されているものがあるため、貝層単位でカウントすると28貝層が当該期に帰属する貝層・貝ブロックということになる。第2表に紹介した貝塚は部分調査がなされただけのものが大半で、中には詳細な調査がなされないまま消滅したものや保存の対象になったものもあり、小規模な地点貝塚や住居内の貝ブロックを除くと全容が明らかになっているものは皆無に等しい。従って、ここでの分析もかなり雑駁なものとなるざるを得なかった。

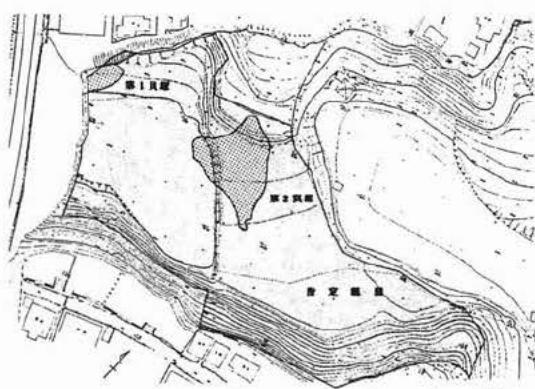
第12図（左上）は中期後葉期に帰属する貝塚の分布を示したものである。東京湾沿岸への集中が顕著であり、県西部における分布が極めて希薄であるという2点を該期貝塚分布の明確な傾向として捉えることができる。かかる傾向は早・前期段階から継続して看取されるもので、神奈川県下においては普遍的な様相である。該期の貝塚は内陸部を中心に分布する前期段階の貝塚に比べるとかなり東京湾沿岸に近い区域に分布しており、海退による分布域の変動を如実に示している。6貝塚（1～6）が分布する鶴見川流域と5貝塚（12～16）が分布する三浦半島南東端に分布の核がありそうだ。両地域をつなぐ東京湾岸には5貝塚（7～11）が

第2表 県内の中期後葉期の貝塚

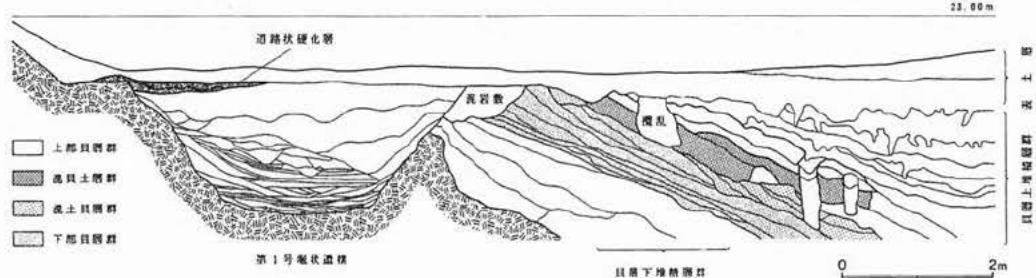
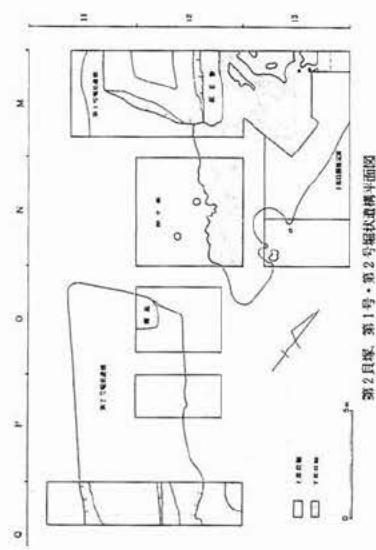
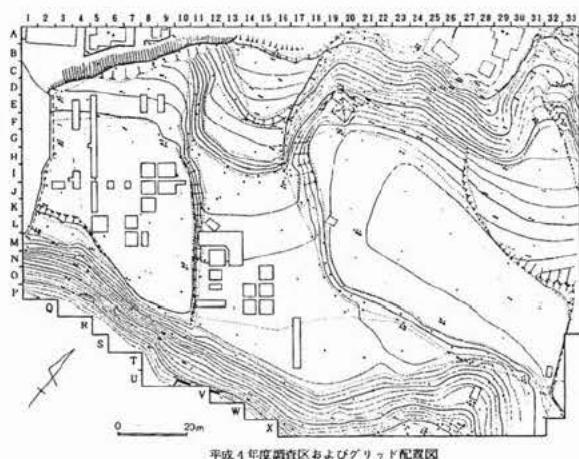
No.	貝塚名	貝層・ブロック	時 期	備 考
1	下田西貝塚		中期後葉	イシシミ
2	北川貝塚	J51号住居内貝層	II段階	J51-71号住居床面直上に人骨、J51号住居
		J56号住居内貝層	II段階	より貝刃、ヤマドジミ主体、ハマクリ・カキ・ハイ
		J71号住居内貝層	II段階	イ、イシジ・シカ
3	宮の原貝塚	北貝塚第1貝層	中期中葉～後葉	マガキ・ハイカ・イ・ハマクリ・オキシミ
4	利倉貝塚	上部貝層	III段階	オキアサリ・ハマクリ
		下部貝層	III段階	イホ・キサコ
5	荒立貝塚	第2区下層	中期後葉～後期前葉	純鍼水産29種類、11基の貯蔵穴検出
6	大口台遺跡（第1・2次調査）	1号住居内貝層	II段階	ハマクリ・アサリ・オキシミ
		4号住居内貝層	I段階	貝層下に人骨、ハマクリ・アサリ・オキシミ
6	大口台遺跡（第3次調査）	14号住居内貝層	I段階	住居址覆土中層域に小規模貝層、イホ・キコ・主体、アサリ・マガキ・カガミガイ
7	山王台貝塚	台地北縁斜面	III段階	ハイカイ
8	杉田貝塚	台地斜面	中期後葉～後期中葉	貝層は弧状分布、ハマクリ
9	称名寺貝塚	A貝塚下層	中期後葉～後期初頭	砂丘上に形成、オキシミ・カキ・ハイカイ
10	青ヶ台貝塚	第1地点貝層	I～II段階	1～3号住居上面に貝層
		第2地点貝層	中期後葉	西斜面に厚い貝層、純鍼20種類
		第3地点貝層	II段階	4号住居上面に貝層
11	榎戸貝塚	B貝塚	中期中葉～後期中葉	カガ・セカイ・イ主体、詳細不明
12	深田貝塚	丘陵西側斜面	II段階	マガキ主体
13	中台北貝塚	台地北急斜面	IV段階～後期中葉	スカイ・イシグ・タミ・サエ・イホ・ニシ等
14	中台南貝塚	台地斜面	III段階～後期前葉	詳細不明
15	江戸坂貝塚	舌状台地北斜面	II～IV段階	中期後半期に貝層形成、標高12m、小貝アロカ点在、ハマクリ・カキ・スカイ
16	吉井貝塚（吉井城山遺跡）	第1貝塚上部a貝層	II～III段階	骨角器・貝刃、スカイ・コシク・カガ・ンガラ・イホ・ニシ・マガキ・レシガ・イ・ハイカイ等、マタイ
		第1貝塚上部b貝層	II～III段階	
		第2貝塚上部貝層1b層	III～IV段階	貝層検出面にヒト群、ヤス状刺突具・板状骨角器・垂飾状骨製品・巴形貝製品、スカイ・コシク・カガ・ンガラ・イホ・ニシ・マガキ・レシガ・イ・ハイカイ等、クロ・イ・ホ・ラ
		第2貝塚上部貝層1a層	IV段階～後期初頭	
17	平戸山貝塚		中期中葉～後葉	厚さ10cm程の小規模貝層、サホ・ウ・キコ・ハイカイ・アサリ・ハマクリ・マガキ
18	向川名貝塚		中期後葉	厚さ30cm程の小規模貝層、タシ・イキコ・主体



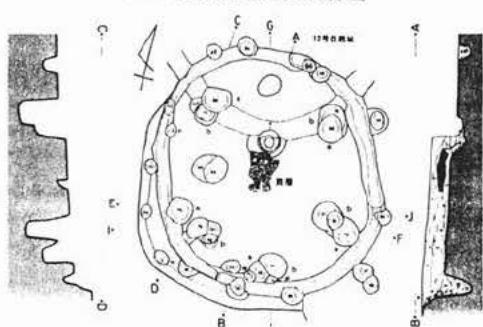
吉井第2貝塚



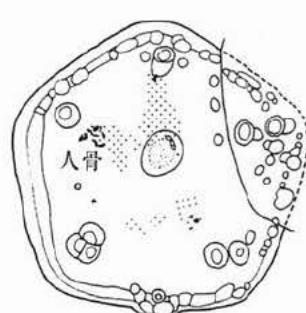
「吉井貝塚を中心とした遺跡」の指定範囲



大口台遺跡第14号住居址



北川貝塚J51号住居址



第12図 貝塚の分布(左上)と主要貝塚

存在するが、分布は散在的である。県央に近い境川左岸に2貝塚(17・18)が存在し、これらが現時点における分布の西限である。

該期貝塚の形態は、丘陵・台地縁辺部に形成される斜面貝塚と住居内(廃屋)等に投棄された小規模貝層に大別できる。大半は地点貝塚と目されるもので環状・馬蹄形をなす大規模貝塚はみあたらないが、Ⅱ段階からⅣ段階に亘る多量の遺物が出土している江戸坂貝塚(15)、2地点4貝層が検出されている吉井貝塚(16)は比較的長期間営続した斜面貝塚の可能性がある。北川貝塚(2)・大口台遺跡(6)は後者の形態を探る確実なもので、他に青ヶ台貝塚(10)もその可能性がある。上述の3貝塚(遺跡)ではいずれも人骨の出土が確認されており、留意される符合である。

(井辺)

#### 引用・参考文献

御堂島 正・長岡文紀 1990 「Ⅲ-2 縄文時代の貝塚の分布」『かながわの考古学』第1集 神奈川県立埋蔵文化財センター  
中村若枝 1994 「神奈川県下の縄文時代貝塚を概観して(序)」「考古論叢神奈河」第3集 神奈川県考古学会

### 10. 土器集中(第13図)

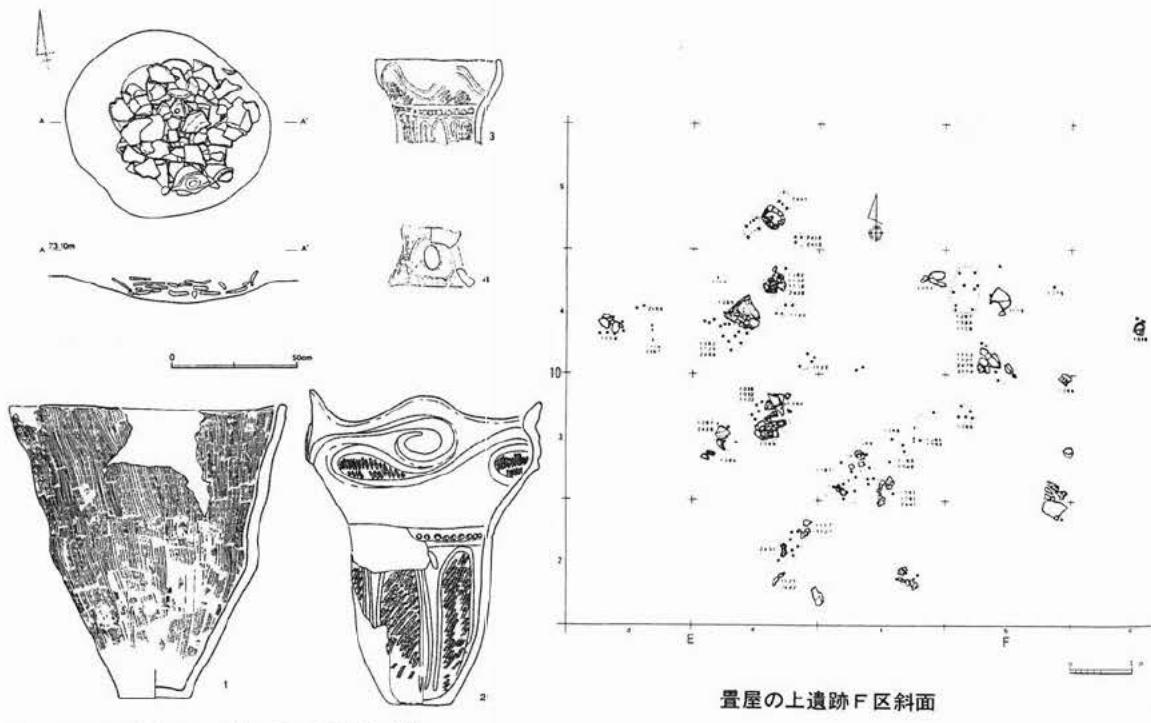
ここでは、初年度に作成したデータベース・データシートをもとに、「土器(遺物)集中」として報告されている事例を抽出し紹介する。

「土器集中」として報告されている遺構は、周辺部との比較においてより遺物密度の高い範囲を包含層出土遺物と区別し、「土器集中」という名称を冠して報告しているものが多い。従って、遺物の出土状況は、破砕資料が高密度に分布するが接合率が低く包含層出土遺物との境界が曖昧なもの、大形破片や完形に近い資料が単独出土しているもの、一括性の高い纏まった資料が集積しているもの等様々である。「集中」とみなす根拠は当該遺跡内における相対的な尺度によるもので、統一的な基準が存在しないため遺跡間の比較が難しい。また、「集石」のように時期決定に難渋することはなくとも、「集中」に至るプロセスに人為(廃棄行為)の介在を明らかにし得ないものも多く、遺構として捉えるかどうかも含め、課題の多い対象である。

「土器集中」として報告されている遺構は一切の人為的な掘り込みを伴わないものが一般的であるが、概して浅いが明確な掘り方を有しているものも存在する。市ノ沢団地遺跡D地区で検出された5基の土器集中遺構(第1~4・6号土器集中遺構)が好例である。特筆すべきは円形基調をなす土坑状の掘り込み中から遺存度の高い複数個体の土器が出土している第1号土器集中遺構(第13図)および第6号土器集中遺構で、一見した限りでは埋納遺構・貯蔵穴あるいは墓坑等との識別に難渋するものである。特に第6号からは完形の炭化クルミが出土していることから貯蔵穴である可能性も否定できず、ここでは第1号土器集中遺構のみを取り上げた。第1号土器集中遺構は、径80cm・深さ10cm程の円形の掘り方を有し掘り方内に土器片100点・礫13点が集積するものである。出土土器は数個体に識別され、うち4個体は復元個体である。短期間の廃棄ブロックの可能性が高いと思われるが屋外埋甕・集石等とともに環状集落の内側に配されており、判断が難しい。

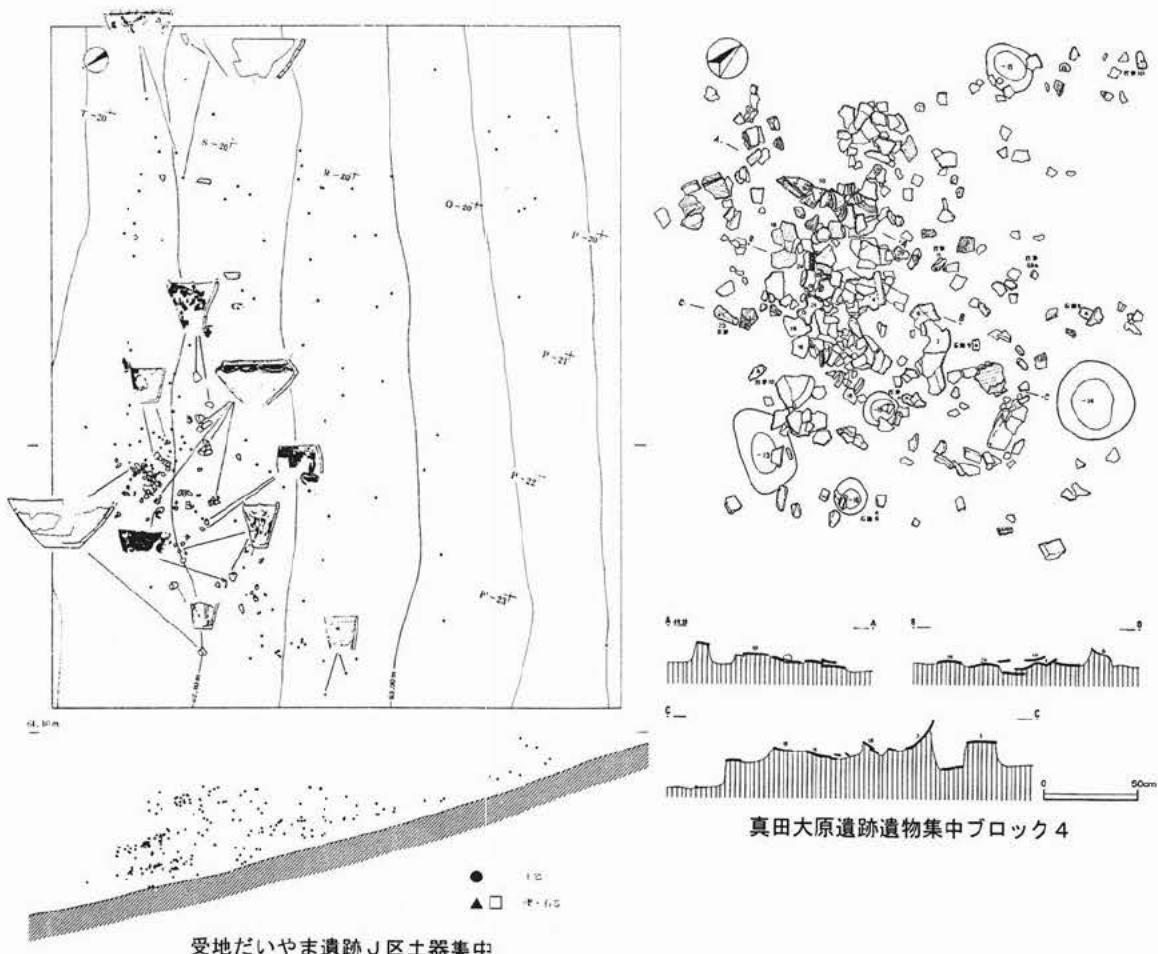
この他、明確な土器集中の事例として「土器捨て場」と認識される空間(遺物集中区域)の存在が挙げられる。ここでいう「土器捨て場」とは、ある期間継続して廃棄行為が行われたと推察される一定の空間を指している。管見に触れたものは、上坂東遺跡(北西斜面土器捨て場)、豊屋の上遺跡(F区北斜面土器捨て場)、受地だいやま遺跡(A・D・J区土器集中遺構)、真田大原遺跡(4号廃棄ブロック)の4遺跡6事例で、うち第13図に3事例の遺物平面・垂直分布図を掲載した。今回は紙幅の関係で充分な検討を行うことができなかった。今後の課題として、ここでは事例の提示にとどめておく。

(井辺)



置屋の上遺跡F区斜面

市ノ沢团地遺跡D地区第1号土器集中遺構



真田大原遺跡遺物集中ブロック4

受地だいやま遺跡J区土器集中

第13図 中期後葉期の土器集中遺構